童

2013 年 11 月 27 日.

先日の予期せぬ大雪には驚かされましたが、その後は例年のような穏やかな日が続き、ちょっとほっとしている日々ですが、周囲の山々はその日以来、白く染まり、本格的な冬の訪れを感じさせてくれます。大地の丘も、風が吹くごとに落ち葉が舞い降り、地面はびっしりと葉っぱの絨毯になっています。

ふと子ども達を見回すと、特に年長児が皆、すらっと上に伸びて大きくなっていることに驚きます。年長児の夏休み明けから、四肢がすらっと伸びて、お腹がへこむと言われている通り、「ああ、もうすぐ卒業なのだなあ」としみじみ思いながら、眺めてしまいます。落ち葉や冬の訪れを感じる中で、ちょっぴり大人としては、寂しさを感じてしまう瞬間でもあります。

先日、ある子どもが「大地は、この時期、とても楽しいな・・・・」（毎日、何かを作っているから　と言うようなニュアンスだったと思いますが、）と言っている　というようなことを親御さんから訊きました。クリスマスマーケットを控えて、お母さんたちの手からどんどんいろいろなものが生み出されている環境。大地でも、ﾏｰｹｯﾄの木製品が生み出され、同時に、家も大工さんたちが作り上げている環境。子どもたちも、秋の味覚の料理やたき火、草木染などなど。子どもたちの周囲が、いい意味で忙しそうに生産的に生み出されていく毎日。そんな中で暮らせる子どもたちは幸せです。子どもたちが 1 番魅力的である絵画的な暮らしがありますから。その意味で、クリスマスマーケットは、クリエイティブな暮らしを子どもたちに感じさせるそして心が躍る素晴らしい機会でもあります。この作り上げていく過程、この環境が子ども達には 1 番の魅力です。本当に連日、ありがとうございます。その子どもたちの心を思いながら、準備を進めるだけでも、私は幸せな気分になり、エネルギーが湧きあがる毎日です。

【暮らし】

昨日の給食。ｼﾞｬﾝﾊﾞｰもいらない暖かな日和でした。志賀高原の雪化粧した山々がくっきり姿を現し、その中を落ち葉が舞い上がり､その中に､割烹着と日本手ぬぐいをした子どもたちが動きまわっています｡たき火コーナーでは､3, 4 人の子どもたちが火をつけながら、ぼんやりと焚火にあたっています。そのすぐ横で、大工さんが、ベランダの造作で材木を加工しています。そのまた横で、青ちゃん夫婦が、材木に塗料を塗っています。そして、ウサギ小屋の横では、野菜を切っている子ども達。かぜさんは、それを見ながら、砂場で遊んでいる光景。スタッフは、あちこち笑顔で眺めながら、時折声をかけています。

この光景は、暖かい秋の日差しの中、とても幸せなものでした。まさに、一つの大家族が、暮らしを営んでいる世界、絵本の 14 匹シリーズ（いわむらかずお）のページのように、赤ちゃんからおじいちゃん おばあちゃんまでそれぞれの世界・役割を楽しんでいる、それを彷彿させるものでした。

焚火の上にかけられた底がすすで真っ黒になった鍋から、湯気たっぷりのすいとんを汲み出して、お椀に盛り付け、両手でふうふう言いながら運んで行く子ども達。割烹着と日本手ぬぐいで座り、すいとんの熱さに口と舌を折り曲げながら食べている子ども達。この光景は特筆ものでした。大工さんにも、給食や何か作った時は、必ず、子どもたちが「いつもありがとうございます。私たちが作りました。どうぞ召し上がってください」と可愛い顔をして持っていくことになっています。これも、大工さんの職人の世界の素晴らしさと周囲の人たちへの感謝と人の営みの素晴らしさを、子どもたちに伝えたいからです。

昼食を終えて大工さんが、召しがあったすいとんのお椀を返しにいらしたので、一緒に焚火で火にあたりながら、子どもたちの光景を眺めました。大工さんの年は、私より 3 歳位上です。言葉の少ない寡黙な人ですが、とても暖かい方です。「いいね、この光景は」と、両手を焚火にあてながらつぶやきました。その手をみたら、私より節くれだち、見事な職人さんの手でした。そのふくらみや汚れ方は、私もいい勝負ができそうでとてもうれしかったです。

人間の手、この手は、何でも生み出すことができる可能性のあるものであり、夢を引き出す、手繰り寄せることができる手ということを、絵画的に生きる幼児には、ぜひ伝えたいと思っています。それは、言葉ではなく、子どもたちの目の前で、同時進行で、同じ時間と空間の中での原体験としてですね。それが、日常の暮らしの中で溢れていたら、子ども達は、毎日、瞳を輝かせて、明日への期待（明日は、どんなものができるのだろう、何が生み出されていくのだろう）と未来への憧れに溢れ、生きる喜びとなっていくのが、幼児の世界です。

幼児は、大人が作業をしている時には、大人の顔を見るのではなく、手許を、つまり大人の手を見ています。「青ちゃんの手、きたねーな」に始まり、「青ちゃんの手スゲーな」で終わります。「何でもつくちゃうもんな」という至福の言葉を最後には頂きます。「皆も同じ手だから、必ずできるようになるよ」と声をかけると、満足そうにしています。それだけで「今日の保育はばっちりだな」と心でつぶやきます。

もちろん大地の「なんちゃってシュタイナー教育」での基本でもあるように、子ども達の周囲に、大人の手仕事、生産的なクリエイティブな絵画的な仕事が満ち溢れている事、それに子どもが興味を示してきたら、一緒に「ちょっとやってみる？」（子どもに体験させたいことは、あらかじめ大人がライフワークのように子ども達との暮らしの中で楽しんでいる前提が必要）と一緒にやってみる事、こんな環境設定や大人側の度量や器の大きさが、必ず必要であり、臨機応変に柔軟性を持って、子どもたちに対応することが、大地のやり方です。

子どもには危険だ、無理だ、危ない、などの基準は、時代や場所や世界、そして、親によって違います。日本でも、３０年前　２０年前　１０年前　5 年前と違います。例えば、刃物やマッチ一つにとっても、年中年長児でも、野山や日常で使いこなしていた私達の幼少期でしたが、今ではとても危なくて無理だと思っていたり。年長児ぐらいになったら、妹弟の子守をして、おんぶして一日面倒を見ていたりした時代は、ほんの５０年前にはありました。

このように、時代と共に、大人の尺度が変わっていきますが、子どもの潜在的な力は変わりません。裏を返せば、大人の尺度の変容で、子どもはその力を発揮することができます。

大地や夢のたねで楽しんでいる、自然体験　料理　ｸﾗﾌﾄ　薪上げ　重機運転　登山　自転車　・・・・・あらゆるものは、大人の度量と工夫で、子ども本来の気持ちのモチベーションを引き出すだけで、大人と一緒に楽しむことができるのです。

「年長児の体力と５０歳のそれとは同等」と言われています。ただ違うのは、モチベーションとその持続性です。幼児のモチベーションは、メルヘンとファンタジックな言葉がけで高まりますし、持続性も高まります。それだけに、幼児を理論ではなく、ファンタジックに育てることが、大人と同等に楽しむことができる秘訣です。